
侵略王

綺穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侵略王

【Nコード】

N6594V

【作者名】

綺穂

【あらすじ】

フォグレストの王リベルエラは、その性質の残虐さから「侵略王」と呼ばれていた。

彼に囚われた王族は、二度と生きては帰れない。

彼の後宮の女たちは、ひと月と生きればいられない。

そんな彼はある時、さらなる国力の増強のために、ランデル大陸で唯一金属物質を採掘できるグリデル王国に攻め入った。

そして、絶世の美女と謳われるその国の王女チエリアを奪い、後宮へと召し上げるのだが……

『貴方なんか、怖くない』

少女は何も映さぬ瞳で彼を見た。

彼はそれに応えるように、繰り返し彼女に自分を刻みつけた。

2人が行き着くのは、憎しみの果ての痛みか、それとも

はじめに

みなさま、「侵略王」に興味を持って下さり、ありがとうございます。

この物語は、「only KISS、only YOU」で語られているランデル大陸南部の大国・フォグレストが大国となるまでを描いたお話です。

ですから、「only KISS、」の方を読んでくださっているみなさま、フォグレストの表記が『王国』、『王』となっているのは気にしないでください。『王国』が『帝国』となるまでのストーリーです。

なお、この物語を読んでいただくにあたりまして「only KISS、」を読んでいただく必要はありません！

単体で読める物語、中編としての連載予定となっております。（作者が気分屋なため、もしかしたら長編になるかも知れませんが）

また、作中にはR15程度の無理矢理描写や負傷の描写が入りますので、苦手な方はご注意ください。

入る回には、題名、前書きの方でお知らせをさせていただきます。

他にも連載をしているので、ずいぶんな亀更新にはなると思いますが、温かく見守って頂けると幸いです。

では、お楽しみくださいVV

01 : 噂話

侵略王、と 男はそう呼ばれていた。

輝くような金糸の髪と、鋭利な漆黒の瞳を持つリベルエラ・フィゲルド・ノーバットは、その残虐な性質によりランデル大陸中にその名を轟かせていた。

ある者は言った。

彼は冷徹な統率者であるのだと。

またある者は言った。

彼は優秀な為政者であるのだと。

しかしみな、結局は口を揃えてこう言うのだ。

彼は陰に蔓延る強大な闇であるのだと。

そして、そんな彼の本当の出自を知る者は少ない。

とある亡国最後の王の御落胤だというもの、とある小国貴族の兄妹間の罪の子であるというもの、その出生の謎を面白おかしく囁く噂は幾通りにも及ぶが、それについて本人の口から何か語られたことは無い。

その冷徹な瞳に似つかわしいほど寡黙で無表情な彼は、自分自身の話すら、その薄い唇に乗せることはほとんど無かったのだ。

そう　　気が付けば、男はフォグレストの王を名乗っていた。

服属させるよりも、支配することを好む。

その手際はまるで、どんなに武力に自信を持つ国であれ、赤子の手を捻り潰すがごとく。

そして手に入れた国の元為政者は一切の慈悲も無く　文字通り

切り捨てられ、その周囲に美しい女でもいようものなら、見せしめのように後宮に召し上げられ鬻られた。

後宮に召し上げられた女は、ひと月と生きてままだではいられなかったほどに。

贅と言うにも相応しいその女達は、みな一様に儂く白い肌をしていた。

面にはぞつとするような憎悪か、あるいは諦めきつた悲嘆の表情を浮かべた優美で艶やかな白い女が、まるで囚人のように近衛の兵に付き従うその姿は、時が過ぎ去るにつれ王都の人々にとっては一種の見世物となっていく。

それが最期には、舌を噛み切ることで、喉を掻き切ることで、胸を貫くことで真つ赤に染まるのだという。

けれどその凄惨な光景を見ても尚、王はいつもの無表情を崩すことなく処理を命じ、悼む態度も出すことなく後宮を去るのだと、それは陰日向に囁かれる城下での、国中での噂だった。

今度は、東のグリデルだと。

あの国か。

そう、ラセドンの国だ。

そしてまたこの頃、密やかに囁かれているのは。

ランデル大陸唯一の金属物質・ラセドンを採掘出来、それによって他の細国よりもいささかの潤いがあるグリデルに、王が攻め込むのだという噂だった。

そういえば、グリデルって。

ああ、絶世の美女と謳われる姫様がいるんだって？

また、あの森に運び込まれる死体が増えるのか。

こんなんでも、世継ぎが生まれなくてもいいのかね。

ひと月やそこらじゃ、胎には何も入らない。

いいんじゃないのかい？　もしかしたら

噂は今日も、密やかに囁かれる。

02 : 略奪

グリデル王国の王女　チエリア・ヴェラノスは、恐怖にでも、驚愕にでも無く、ひたすら目を見開いていた。

けれどそれは、「至高の華」と呼ばれる、彼女の美しい容色を掻き乱すことは無い。

淡いグリーンドレスを身に纏い、滑らかな銀髪を少女らしく緩く纏め上げたその姿は、この世の者とは思えぬほど美しく、雪色の肌に埋め込まれたサファイアの瞳は、刹那の哀しみに囚われひどく澄んでいた。

「父様」

彼女は静かに父王を呼んだ。

比較的高じまりとした、それでも充分に厳かな玉座に腰掛けているその人は、しかし既に彼女の知っている父では無く、王としての威厳も矜持も捨てた、ただ命に縋るひとりの滑稽な人間に成り下がっていた。

「父様」

それでも彼女は、父を呼ぶ。

生まれた時から重責を背負い続け、それを捨て置くことを望んでいなくせに、取り上げられる瞬間には泣いてしまった愚かな為政者に、未だかつての栄耀を求めるように。

「来たのですね」

そして次の言葉は、最早父へ向けた言葉では無く。

玉座の間に押し入ろうとするフォグレストの兵と自国の兵の剣が、盾がぶつかり合う音が少しずつ近付いてくることへの、諦観にも似た言葉だった。

扉は開く。

「グリデルの王、ローナッド・ヴェラノスとその王女、チェリア・ヴェラノスとお見受けしたか？」

周りを屈強な兵で固め、先陣を切り入ってきたのは、透けるようなブロンドと、深く捕らうような闇色の瞳を持った、美しい男だった。

彼は既に玉座にその身を深く沈め、力無く項垂れる父王を見咎めると、その整った面をさして面白くもなさそうに歪めて、声高に言った。

「この国は只今より我、リベルエラ・フィゲルド・ノーバットの支配の及ぶ処とする。依存は無いな？」

「……」

しかし黙りこくる父王に、けれど男は何の関心も示さない。

「尚、お前たち王族の身柄は、フォグレストが握ることになる。とりあえず 王都へいらして貰うことになるが」

とりあえず、の意味など、彼女は聞くことも無く分かった。それは王都へ着いなら即座に、自分たちがフォグレストの反逆者として、死体を晒されるのということだ まるで戒めのように。

けれど男は、チェリアの方を一瞥すると、先ほどとはまた違う、どこか残酷ささえ含む笑みを浮かべ、傍らの男に囁いた。

「あの姫は、俺が連れていく。ブラッディ・インナーの新たな住人だ」

数刻後、最早抜け殻となった父王は、王宮の一室に潜んでいた弟たちと共に屈強な兵たちに連れられて行った。そして彼女は、我がものであったはずの玉座の間に、あの男と共に残されている。

あの兵の中に在って最も華奢でありながら、最も圧倒的な存在感を纏うその男。

彼女は彼がどんな人間かを知っていた。否、彼ははランデルに生きる者にとって、知らざるを得ない存在だった。

「俺が、怖いかな？」

男は唐突に、チェリアにそう訊ねた。

彼女は少し迷った後、静かに首を振った。

「もう何も、怖くありません」

「ほづ…?」

「人が何かを怖いと思うのは、失うべき大切なものを持っている時です」

「お前は持っていないのか?」

「貴方がたった今、全部盗っておしまいになられたではありませんか」

クスクスと、彼女は白く嘲笑った。

そして男もそれにつられるように、低く呻くように嘲笑った。

「まだ、お前が失っていないものはある」

そうして静かに、男は女を大理石の床に組み伏せた。

03 : 散華「R」(前書き)

R15描写・無理矢理描写が入ります。

「はっ……」

最早どちらのものとも思えない息遣いが空気の中に散らばり、2匹の獣が絡み合うその一角だけが、別世界のように濃密な空気を纏っていた。

リベルエラは、彼の与える苦痛に耐えるように眉根を寄せる、けれど無表情な女を見下ろしながら、可笑しそうに息を吐いて呟いた。

「これで……お前はすべてを失ったな」

その言葉に、チェリアはちらりと男の漆黒の瞳を覗き、そして諦めたようにまた眼を閉じた。

引き裂かれたドレスは、ただの布の塊と成り下がって。

男に蹂躪された白い肌は、幾つもの小さな紅い薔薇を宿して。

ゆっくりと、まるで探るように彼女に腰を打ち付ける男は、始終皮肉めいた笑みを絶やすことなく、その媚薬のような低音を耳の内に

注ぎ込む。

淫乱な華だな。元より蜜の垂らし方を知っているとは。

知っているか？ 華は散るその瞬間が一番美しい。

そのたび、チエリアは知らず自分の内が狭くなるのを感じていた。

知らなかったはずのその感覚は、男を覚えるように幾度も彼女を襲い、身体を引き裂くような痛みの中に生まれる痺れは、最早自分が自分であることを忘れさせた。

リベルエラはそれでも尚、律動を繰り返し、チエリアをどこか知らぬ場所へ導こうとする。

「あぁっ……」

そして絶頂の数歩手前まで引き上げられ、彼女はそれまで堪えていたものを我慢しきれなくなったかのように、ひときわ高い声で啼いた。

それはまるで、男に媚びるような声。

チエリアは、愕然とした。

我を忘れ掛けながらも、ひと欠片残っていた理性が彼女に囁く。

お前のすべてを奪った男に、このまますべてを委ねるのか。

「やっ……………いやあ」

そこで彼女は初めて、男に対して拒絶の言葉を吐いた。

すると彼は、まるでやっとな本懐を遂げたかのようににやりと微笑み、チエリアの細い腰を掴んで更に腰を強く、速く振り始めた。

「そっだ……………そっやって拒め……………俺を憎めよ」

リベルエラの声は、深く、彼女の耳を犯した。

「やっ……………やめて、」

「今更」

「いや……………怖い、怖い」

「怖い？ 怖いものは無いんじゃないのか？」

「いやあっ」

せせら笑う男の胸に、少女の真っ白な力無い手の平が、微かな抵抗を示すように置かれた。

つい数瞬前までは、切り散らかされたドレスを縫るように握り締めていたその指が開き。

それはまるで、固く閉ざされた蕾がこじ開けられたかのような態だった。

「もっと、憎めよ」

「ああっ……」

「忘れられなくなるくらい、強く」

そして少女の細い身体は男の下で弓形にしなり、男は欲望を残らず吐き出した。

大理石の上に散らばる、真っ赤な純潔の欠片。
リベルエラは自分が散らした華に、薄く微笑んだ。

「『怖くはない』か……」

彼はそして、自分の傍らに絶命したように横たわる美しい少女を見やった。

銀系の髪は、すっかり外の世界に落ち着いた銀月と、同化するように輝いて。

ついさっきまで怯えたように、助けを請うように彼を見つめていた碧色の眼は、疲れ切った表情を浮かべた青白い顔の中に埋もれている。

彼はもう幾度、あの問いを女に投げ掛けただろうか。

そのたび、美しい女たちは様々な顔を見せた。

怯えた顔、憎らしいという顔、蔑むような顔、哀れむような顔。

けれど、そのどれもが無言の応えであって、彼に何かを返してきた女はいなかった。

まして、「怖くない」などは

「はっ」

男は声を上げて笑った。

まるで、拒むようにすべてが終わった瞬間、気をやった彼女を嘲る

よじり。

「見モノだな」

この日から、チェリア・ヴェラノスは血に濡れた後宮
ブラッデ
イ・インナー
の、新たな住人となったのだった。

04 : 決意

あれが、新しい。

ああ、グリデルの姫様だ。

新たな王の犠牲者を届けるための、近衛兵たちの列を見送る王都の人々は、みなひっそりと語る。

「またか」と。

密やかなさざめきを兵たちは、受け流すように列を乱すことも無く歩いていき、

当然のごとく、その狭間で歩くチェリアの耳に入ることは無かった。

それで？ グリデルは？

うちの国の直轄地になっただろう。だって、なあ。

まあ、姫様が後宮に上がるくらいだもんなあ。

そしてみな一様に、哀れむような溜め息を吐く。

悪いお方ではないんだよな、リベルエラ様も。

ああ、城下の市場も活発にして下さったしな。

あの方が王に立たなければ、俺らは多分、今頃路頭に迷ってた
だろうし。

悪いお方では、ないんだよ。

そんな中「そういえば」と、最初に言い出したのは誰だったろうか。

なんか、今までの姫様とは違う気がしないか？

違う？ 何が？

何だろうなあ。美人だっということとは変わんないんだが。

でも、言われてみれば、確かに違う気もするよ。

囁きは、止む。

城下に住まう数人の男たちは、そこで始めてその少女を、なんのフ
ィルターにも通さずに見たような気がした。

やっぱり、違うよ。

ああ、違うな。

前を、向いてる。

表情が、違うんだ。いつもと。

彼女の浮かべている表情。

憎悪でも、諦観でも、悲嘆でも無い。

それはまるで、固く何かを誓った、彼女の決意を表わすかの様な。

いつもの女たちとは違う、纏う勇壮さを彼女に見出しながら、男たちはみな一様に、先ほどとは似て非なる溜め息を吐いた。

強い、姫様だ。

リベルエラ様の、新しい。

なあ、もしかしたら

ここで囁かれた、密やかなざわめきを、再びと思い出す者はいない。

チエリアに与えられたのは、後宮の奥深く、最早誰の目にも付かないのではないかと思えるほどに、入り組んだ先に在る豪華な一室だった。

「何かご入り用の物がございましたら、私共になんなりとお申し付け下さいませ」

チエリアをその一室まで案内してきた中の、最も年配と見える侍女が、彼女に腰を折りながら言った。

彼女は侍女たちの様子にいささか驚きながらも、言葉を発する気力もなくベッドのように広いソファに深く沈み込み、そして鷹揚ともとれる頷きを遣って下がらせた。

あの眼は、何？

彼女を取り巻く好奇の眼。

今度はいつまで保つのか、それを探るような数多の白い眼。

今までここに押し込められた女たちは、みなあんな眼に晒されたのだろうか。

その上あの冷酷な漆黒の瞳に組み敷かれ、散々と髑られて散らされたのか。

分からない。分かるうとも思わないが。

それでも彼女が心の内に留めたのは、あんな男のために死んでくれるかという、矜持にも似た生への執着だった。

そしてノックの音と共に、先ほどの侍女が王の夜の来訪を告げた。

チェリアは身震いをひとつした後、それを打ち消すかのようにはつきりとした声で返事をした。

「お待ちしておりますと、お伝えください」

かくして、かつて愚かな女たちが幾人も血に塗れたブラッディ・インナーでの、チェリアの生活は始まった。

05 : 受容「R」(前書き)

R15描写・無理矢理描写が入ります。

「苦しいか？」

「……………」

男は少女に跪きながら、低く妖艶な声を放った。

けれどチェリアはそれに何の応えを寄越すこともせず、碧色の眼を僅か開いたまま、表情すら変えないで王をその両足の狭間に受け入れていた。

喉の奥には、決して表には出せぬ嬌声が張り付き。

リベルエラはそれに気付き、やはり慣れた皮肉げな笑みを浮かべた。

「我慢などしなくていい。聞かせる」

「……………」

「……………無反応、か。少しは俺を労わろうとは思わないか」

「……………」

「まあ、それが返答だろうな」

そうして男は濡れた舌を、彼女へと這わせた。

女を香らせるチェリアの無表情を、腿の間から垣間見るように眼を細めながら。

ぴくりと、快楽に慣れぬ彼女の身体は素直にいたづりを迎え入れる。

跪いているもののその実、屈辱を受けているのはどちらか。

王はそんなことなど分かりきっているというように、彼が教えるまでは何も知らなかった身体を苛み続けた。

そしてリベルエラは、その微かな兆候を見逃さなかった。

「あつ」

微かな声。

堪えに堪え、けれど耐えきれなくなったかのように、綻んだ紅い唇から零れ落ちた一滴。ひたひた

男は愉悦ににやりと口元を歪め、一気に少女を貫いた。

「あああつ」

上がった嬌声は、彼の欲望を満たし、けれど増幅させた。

未だ残る痛みに顔を歪める少女を見やり、そっと、白く細い輪郭に掛かる銀糸を払って、耳へ直接艶声を注ぎ込む。

「痛いか…?」

「あつ、や」

「そんなに痛いなら……止めてやってもいい」

そう言つて彼は、しばらくとチェリアを組み敷いたままじつと動かなかった。

彼女は、1度目とは違い、全く動くことのないリベルエラに、訝しげな瞳を向けた。

「ど、して」

「何が?」

「前、のように……」

「……動かないのか?」

そこで男が、ぐっと奥へ突き上げた。

「あぁっ」

「お前は？ 動いて欲しいのか？」

「やつ……………そんな、ことは」

「ないか？」

そしてまた、ぐっと決る。

「んぁ」

「未だ、痛いんだろう？ 何しろ2度目だ」

「いやぁっ」

「止めてやると言っている。もっとも、お前の方から絡み付いてきたが」

チエリアはその感覚を、鮮明に感じていた。

奥底に理性を保ちながら、本能は男の与える快楽に身を委ねると言ってくる。

リベルエラはそんな少女の葛藤を知り得ているかのようにまた腰を奥へ進め、痛みの薄まった彼女の鋭敏な感覚は、それを容易に受け

容れた。

「あぁっ……ん」

「どうした？ 止めなくていいのか？」

意地悪く囁くものの、王には最早その返答は要らないようだった。

リベルエラはいつしかチェリアを苛むことだけに意識を傾けるようになり、チェリアはリベルエラに向けていた憎悪を片隅に置いて、快楽に溺れる恐怖から逃れるように彼にしがみつくようになった。

そこに在ったのは、ただ一対の獣だった。

絶頂を迎え、崩れ落ちる少女の内に、男は同時に沈み込んだ。
彼らは互いに視線を絡ませた後、そのまま何事も無かったかのように眼を閉じた。

そして。

疲れ果て、柔らかな寝台にその身体を埋めた2人は知らず寄り添い、ひとつの上掛けを共有していた。

それはまるで仲睦まじい夫婦のようで、翌朝チェリアを起こしに来た侍女はその光景を見て啞然としたという。

王が後宮で一夜を明かすなど、これまで一度も無かったことなのだから。

けれどチェリアは知っていた。

王が夜明けに眼を覚まし、「面白い女だ」とクツクツと嗤っていたことを。

まるでチェリアがその声を聞いていることを知っているかのように、耳元に唇を近付け、「お前はいつまで保つかな？」と囁いたことを。

期待に眼を輝かせる侍女を見て、彼女はそつと自嘲的な笑みを零す。すると散々と啼いて乾いた唇が、その歪みにピリリと痛んだ。

そういえば、あの冷酷の王がその唇に触れたことは、一度も無かった。

王は毎夜、後宮へ通った。

以前の後宮の女たちは、何の前触れも無く、数日置きにやってくる冷酷な男にひどく怯えていたものだったが、チエリアといえば、毎日のように呑みこまれる快樂に怯えなければならなかった。

けれどそんな王について、若い侍女たちはチエリアの周りを囲み嬉々として語る。

どうやら彼女は、王の後宮に仕える年若い侍女たちにひどく慕われてしまったらしかった。

こんなに王が通い詰めた女性はチエリア様が初めてです。

実は、以前は王が後宮へお越しの度に夜の悲鳴に悩まされていたのですが。

王はチエリア様にはとてもお優しいみたいですわ。

他の女性たちは日に日に憔悴していらっしやいましたのに。

チエリア様は日に日にお美しくなられて。

「違う」と。

チエリアは声を大にして叫びたかった。

王が少女の元へ毎日のように通うのは、目を開けるよりも彼女を苦しめるからだ。

悲鳴が聞こえないのは、彼女が犯されることよりも快樂に溺れることを嫌うからだ。

王は優しいのではなく、優しい振りをすれば彼女が屈辱を覚えることを知っているのだ。

彼女が他の女たちと違うのは、未だ生を諦めていないからだ。

しかしそれも、フォグレストの恵まれた環境の中で育ってきた娘たちには分からないのだろうと、彼女はそこまで歳が変わらぬ侍女たちを見ながら溜め息を吐くのだった。

グリデルの王　今はフォグレストの捕囚となっているが　は、幼い頃からその責を厭っていたのだと、親子二代にわたり教育係となった女が言った。

何故自分なのか。何故自分は民のために犠牲にならなくてはいけないのか。

幼子は少年となり、少年は青年となり、青年は王となっても尚、彼はその疑問を抱え続けたという。そして彼がやがて妃を娶り、その妃が長子である娘のチェリアを生むと、その疑問は更に大きくなった。

何故女というだけで、責から逃れることができるのか。

彼は自分が男として生まれた運命を呪った。

野心を持たない男はしかし、悟られないために虚勢を張り続けた。

けれどそんな父の思いとは裏腹に、チェリアは成長するにつれ美しく聡明になり、父よりも優秀な為政者たる頭角を現し始めていた。

彼は当然、自分とは全く裏腹な娘を疎み始める。

自分に無いものを持ちながら、その責を求められない娘を。

チェリアの教育係は、チェリアが父とぶつかり、争っては泣く度にそう言い聞かせた。

「だから貴女はこのままでいいのだ」と。

「王もいずれ貴女を分かる時が来るでしょう」と。

そんな女も、戦乱の最中に散った1人となった。

そして亡き母に代わる良き理解者だった女を失くした今、残ったのは国を愛するが故に気難しくなってしまった少女だった。

素直な思慕さえ受け容れられない。
僅かな希望にすら焦がれない。
恐怖を抱えれど縋れない。

彼女の命を繋ぎ止めているのは、ただ自国であったグリデルの民が、
平穏な生活を取り戻すことを見届けるため。
そのためならば、あの冷酷無情な男に身体でも魂でも売り渡したつ
て構わない。

父に見捨てられた民を、チェリアが見捨てるわけにはいかない。

それが、今までに召し上げられた女達と、チェリアとの決定的な違
いだった。

けれどそれも、彼女の周りに侍る娘たちには分からぬことだろう。
あの王が混乱の世紀を鎮めてからこちら、フォグレスト王国は安寧
に包まれているから。

フォグレストの統治下に入った国々は、元の為政者を殺されこそす
れ、民が迫害されることも無いのだという。
むしろ元の暮らしよりも豊かになったところすらあり、それを聞いた
時にチェリアは愕然としたのをよく覚えている。

城下に見える人々の表情は非常に柔らかで、仕える者たちは口を揃
えて「王は良い為政者だ」と言う。

リベルエラ・フィゲルド・ノーバットとは、結局はどんな人間なのか。

誰も、知らない。もちろん、幾度も身体を重ねたチェリアでさえ。

そしてチェリアが後宮に召し上げられてから、もうすぐひと月が経とうとしていた。

07 : 疑問

チエリアは寝台の縁に浅く腰かけながら、いつものように王が自分の居室を訪れるのを待っていた。

部屋の奥、ガラス張りの大窓から覗く美しい満月を眺めて、彼女はひっそりと笑う。

慣れはすっかり、彼女の身体に染みついてしまったらしい。

王は夜も更け、月が凜然と輝く刻限になると、必ずチエリアを抱きに来る。

そして彼女も、最初の方こそ男から逃れようとしていたものの、チエリアが寝台にいなかった時の方が男の与える快感が強いことを悟り、それ以来徒労を重ねるのも止めるようになったのだ。

「侵略王」としての采配を振り、大国の為政者としての執務をこなし、その上で彼女を苛みに後宮まで足を運ぶ彼の強靭さに、最早圧倒されずにはいられなかった。

自分からグリデルという国を奪ったその王を忌みながらも、かつての使用人たちから「グリデルはかつて以上の安息を手に入れつつある」という話を聞いてしまったは、その感情が何のために存在するのかも分からなくなりそう。

まして「グリデルの平穩を見届けるまでは」という誓いは、行き場をなくし始めている。

それに、彼女が国の次に守りたかつたはずの家族の処刑日の報せも、一向に彼女の元にはもたらされない。

聞いていたのとは裏腹なりベルエラ王の姿を感じるたび、チェリアは混乱していた。

そして、そんな彼に染められ、与えられる快樂に溺れていく自分の身体を、ひどく持て余すようになりつつもあつた。

優美な風景を眺めながら、皮肉げな笑みを浮かべた男がいつも入ってくる扉に背を向けている自分は、本当は彼が来ることを望んでいないのではないのか。

違つと頭を振りながら、その実否定しきれない感情は確実にどこかに潜み。

想いに耽り、どれだけ経つたのだろうか。

いつの間にか彼女は、足を外に投げ出したまま寝台の上に身体を横

たえていた。

美しい月は光の中に隠れて空は白み始め、その強烈な光が、チェリアの瞼に刺さり無理矢理に彼女を目覚めさせる。

いつもならば自分を包んでいるはずの体温。

それが無いことに気付いて、そしてチェリアは悟った。

その日、チェリアが召し上げられて初めて、王が後宮を訪れなかったのだ。

「王は戦に向かわれました」

侍女はそう言った後、朝の紅茶をチェリアの前に用意しながら、彼女を安心させるように微笑んだ。

よほどチェリアの顔が、憔悴しているように見えたのだろうか。

単に寝不足なだけだと、言ってもこの侍女には通じないのだろうか。

「大丈夫です。王は今まで、戦では掠り傷ひとつ負ったことが無いと言いますから」

「そう。強いよね」

「ええ。我が国の絶対の王です」

当たり障りのないことを言えば、憧憬の念をたっぷりとまぶした答えが返ってきた。

この年頃の純粋な娘にしてみれば、あの男は理想を背負っているのだろう。

チェリアが、その男に戦で擦じ伏せられた国の王女だったことすら忘れて、眼を輝かせている。

彼女にとっては、男の強さなど恐怖の対象でしかないのに。それがあから、チェリアは彼を憎むより他に何も出来ないでいるのに。

けれど彼女が溜め息を吐けば、何を勘違いしたのかその侍女は、彼女の肩を掴んで力説した

「チェリア様、大丈夫です！ 王は他の女性のところではなく、戦へ行っただけですから！」

「え、ええ……そうなの」

「ですから、戦から戻られればきつと、すぐにでもチェリア様の顔を見に飛んでいらっしやるでしょう!」

「あ、そ、そうなのかしら……」

「はい!」

そして自信たっぷりに言い募った侍女は、言いたいことをすべて言っ
て満足したように、また紅茶の準備を再開した。

その様子を見て、チェリアはまたこっそりと溜め息を吐く。

しかし奇しくも、その予言めいた言葉は正鵠を射ることになるのだ
った。

扉が唐突にボタンと開いて、与えられた居室の露台からぼんやりと庭園を眺めていたチエリアは、一瞬その身を竦ませた。

それは何か、不吉の訪れのように。

そしてその不安を裏付けるかのように、現れたチエリア付きの侍女は、普段の底抜けに明るい笑顔を強張らせて、見るからに焦っていた。

「あの……チエリア様、大変でございます」

「どうしたの？ そんなに慌てて」

「たった今、王が遠征先からお戻りになりました。もう既にこちらへ向かわれていると」

思わず、チエリアはさっきまでいた露台を振り返り、外の明るさを確認していた。

「今は夜……ではないわよね？」

「見ての通りでございます」

「じゃあ、また女性を連れて来られたんじゃ……」

「それにしたって、王が直接連れて来られることはまずございませ
ん」

「でもこんな日の高い時間からいらっしやるなんて」

「しかし、お迎えしない訳にはいきませんので」

そして言い終えるなり侍女は、茫然としているチェリアの手を引き鏡の前に座らせて、朝から下ろしたままだった髪をテキパキと結び上げて、丹念に化粧を施す。

「わたしの言った通りになりましたでしょう？」

作業をしながら、年若い侍女は無邪気に微笑んだ。

チェリアはそれに苦い笑みを返しながら、普段使いのドレスの裾を、きゅっと掴む。

誰かが、王の訪れを告げた。

「下がれ」

チエリアの居室に一步足を踏み入れた瞬間、リベルエラは自らの後ろに控える侍従と、チエリアの侍女に向かってそう言い放った。

心なしかその頬はこけ、眼の下には疲労の痕がある。

真っ黒な、殺戮のための装身具を纏ったその姿は、彼があのだ獄から帰ってきたのだということ、如実に語っていた。

チエリアは各々頭を下げ去っていく使用人たちを見送りながら、いつもとはどこか違う男を見遣り、パタンとその大扉が閉まっても尚、掛けるべき言葉に迷っていた。

そして、2人の間の沈黙を破ったのは、彼の方だった。

「迎えの一言も無しか？」

猛る肉食獣のようなその眼は、言いながらも彼女の身体を這い回る。そしてその眼を湛えたまま、少し距離を縮めるように近付いたりべ

ルエラは、彼女のほんの数歩先で立ち止まった。

チエリアは、部屋着である薄いドレスに心許なさを覚え、胸の前に腕を抱えた。

「おかえりなさいませ。ご無事で何よりでございます」

腰を折れば、頭頂が低い声を拾う。

それは鼻で嗤ったその吐息を含み、チエリアの銀髪をサラサラと揺らした。

「はっ。取って付けたような挨拶だな」

「なにぶん、豊富な語彙を持ち合わせておりませんもので」

「グリデルの姫は才色兼備で有名だったはずだが？」

「お気に添わず申し訳ありません」

「お前は何を謝っているのか……」

「いえ、想像とは違った娘に嫌気がさしたのではと思ひまして」

すると男は、どこか悔しげに顔を歪めた。

「……………もういい、来い」

舌戦の突然の終結に、チエリアは呆気無さを覚えて腕を取られるがままにした。

リベルエラは、居室の最奥へと彼女を引っ張っていく。

そのまま進む先には、何があるとも意識せずに、「どこへ向かうのです？」と訊ねたりもした。

いつも男が向かう場所など、ひとつしかないというのに。

辿り着いたそこには、このひと月幾度も男に組み伏せられた、2人のためと言っには随分と広い寝台が置かれていた。

掴んでいた手を離し、男はチエリアに振り向いて言う。

「脱げ」

「……………え？」

「服を、脱げ」

嘯かれた言葉に、チエリアは身を固くした。

「そんなこと……」

「お前に拒否権があるのか？」

「でも、」

「グリデルは俺の手の中にある」

「……………」

「早く」

そして男は急かすように、チエリアの胸の前で留めたドレスのボタンに手を掛けた。

そのままその開き目を、破ってしまいそうなほど。

チエリアは戸惑いながら身体を引いて、男の手から逃れると、今度は自らそのボタンをはずし始めた。

そうしてパサリと薄衣が滑り落ちたその瞬間、チエリアは仰向けに

なり、その碧眼を覗き込むように王は彼女を組み伏せていた。

チエリアは、彼女を寝台に組み伏せた王が、頭の両脇に手を付いた時にわずかに顔を歪めたことに気が付いていた。

けれど、日の中で肌を晒すことへの羞恥と、自ら服を脱ぎ捨てたことへの混乱から、彼女にはそれ以上何かを考える心の余地は無く、ただ首筋を辿る唇の感覚だけを感じていた。

ずっと、違和感があった。

王はなかなか、黒衣を脱ぎ捨てなかった。

チクリと素肌に擦れるその布地はひどくこそばゆく、チエリアは彼の唇があちこちを這うたびに、その身を擦った。

「お脱ぎに、ならないのですか」

次第に荒くなっていく呼吸の狭間、ようやく絞り出した声も、彼には聞こえていないよう。

いつもならば、チエリアの零した吐息ひとつすら逃さず、捕まえては鬪るといふのに。

「……陛下」

呼んでみてもやはり、リベルエラはピクリとも反応しない。

けれどその間も止むことのない、彼女から快樂を引き出そうとする動きは、いつもよりひどく強引で、性急で。

チエリアは諦めを感じ、深い溜息を吐いた。

そして行き場を失くしていた両手をそっと持ち上げると、迫りつつある強烈な波に押し流されぬようと、男の肩にそっと縋った。

本当に、そっと。

けれどその瞬間、王はとてつもない勢いで彼女から飛び退き、右肩を押さえて低い声で呻いた。

獣の唸りのようなその声は、もう意識の半分は快樂に吞まれていたチエリアの頭を一気に覚醒させ、苦悶に満ちたその表情は、思いがけず彼女の眉根を寄せさせた。

そのただならぬ様子にチェリアは、空気に晒されている胸元を右腕で隠しながら、左腕を支えにして半身を起した。

「陛下……」

「なんでもない」

「陛下……！」

「なんでもないと言っている。続けるぞ」

しかし、再びチェリアを組み伏せようとした王を、彼女は赦さなかった。

「陛下！ お止め下さい！」

「うるせえ」

「陛下……！」

「……」

「陛下……リベルエラ様」

するとベルエラは、その懇願のような呼び掛けに応じるように、顔

を上げた。

チエリアは、やっと自分と目を合わせた王を、睨みつけた。

「お怪我を、なさっているんですね」

「……………」

「なぜ、侍医にお診せにならなかったのです」

「…………… 必要ない」

「小さな傷ひとつで、死ぬことだってありますのに！」

王は、すっと逃げるように彼女から眼を逸らして俯いた後、何かを決したように再び彼女を見つめた。

「お前は……………」

「はい」

「お前は、俺が死んだ方がいいんじゃないのか」

「なぜです」

「俺が死ねばお前は自由になる。お前の家族もだ」

その言葉に、チェリアは深い溜息を吐いた。

彼女は、その溜息に、王の瞳が揺らめいたことを知らない。

ただ、奥歯を噛み締めて、あらゆる勇気を絞り出した。

「わたくしの身ひとつ、何だというのです」

「なに？」

「わたくしの身など、わたくしの家族の自由など、何だというのですか！」

「な………」

「貴方が死んでしまつたら、残されたこの国の民は、どうなつてしまつのです！ 貴方に忠誠を尽くす臣は、平和を託す者たちは、貴方ひとりがいなくなつた途端に丸腰になつてしまつのだということをお貴方は理解しておられないのですか！」

「……………」

「グリデルの民も、今ではフォグレストの民です。わたくしは、わたくしの愛した民があれ以上苦しむのを見届けるためにここに来た訳ではありません。どうか、お怪我を侍医にお診せ下さい」

しかしチェリアの剣幕に圧倒されていた王も、その言葉には頷かなかった。

「それは、出来ない」

「なぜです」

「そこまで言うお前なら、分かるだろう？ 侍医に診せたことが、もし外に漏れたらどうする」

「それは……」

「怪我をしたと外に知れたら？ しかも右肩に傷を付けたのだと知れたら？ ……俺の存在を皆だと思っている連中は、すかさずフォグレストに攻め入るだろう。自惚れでなく、俺の黒衣そのものが戦場では恐怖なのだと、お前も知っているはずだ」

「……しかし」

「いい。邪魔をした」

すると王は寝台から降り、踵を返して重厚なドアへ向かった。

「お待ちください」

無意識のうちに、チェリアはその広くも孤独な背中を呼びとめてい

た。

なぜ、自分がその背中を呼びとめたのかは分からない。

ただ、どこか揺れているように見えるその影が、ひどく寂しげに見えた。

「お座り下さい」

そう言うとチェリアは、おもむろにベッドサイドにあったガウンを素肌の上に羽織り、鏡台へ歩いていった。

その一連の動作をどこか呆然と見つめていた王も、はっと何かの拍子に我に返ったのか、複雑な表情をした彼女の行動を訝しみ、そして訊ねた。

「何をやる気だ？」

すると彼女は、さもなんでもないことのように返した。

「治療です」

「治療？」

「ええ。幸い、薬草などは持ち込んでおりましたので」

「お前がか？」

「他に誰がいるというのです？」

そしてリベルエラは、またしても呆然とした。

眼の前にいる、まだ少女ともいえる王族の女が、治療などと。

しかし、確実に肩の痛みは彼の意識を侵食し、最早抗えないところまでそのうねりは押し寄せていた。

もう、どうなってもいいかもしれないと、考えきれない頭は結論を出す。

そして王はしばらく逡巡した後、大人しく寝台の端に腰を下ろすのだった。

「やけに慣れてるんだな」

リベルエラが意外そうに呟くと、チエリアは頬骨のあたりを紅く染めた。

黒衣を脱いだ奥にあった傷が思ったよりも深く、そのことに蒼くなっていた彼女の顔色のコントラストは、どことなく不可思議で、けれど美しい。

「よく、父の名代として戦地へ赴きました」

「それにしても……」

「あんな場所では、王族も傭兵も一人の人間でしかないってことは、ご存知でしょう？ 何もしないでいるうちにいたたまれなくなつて、せめて仕事をくれと懇願したんです。結局、それも迷惑を掛けてしまったことになるのかもしれませんが」

「だからといって、なにも王族が」

「陛下だって、戦場で実際に戦われているではありませんか」

おまけにこんな傷までつくって、とぼやいた彼女は、どことなく老成しているように見える。

リベルエラはそんな彼女を見て、よくも分からない衝動に突き動か

され、その衝動を意識した次の瞬間には、口を開いていた。

「俺の出生の噂は、聞いたことがあるか？」

突然始まった話題に、一瞬少女は首を傾げた。

しかし何かあるのだろうと察した賢しい彼女は、聞いたことのあるいくつかを返答として返した。

「とある亡国の王の御落胤ですとか、とある小国貴族の兄妹間の不義の子だという噂ですか？」

「ああ、それだ」

「それが、どうかしたのですか」

「いや、よくもまあそんなありもしないことを並べたてられると思っ
つてな」

クツクツと、王は面白くなさそうに声を立てた。

「ありもしないこと、なんですか？」

「俺は、貧しい農民の出身だ。高貴な血なんか微かにも入ってない」

そして自嘲するように嗤う彼に、チェリアは言葉を返せなかった。

思わず手を止めてしまったせいで薬草が傷口に沁みたのか、王は少しだけ顔をしかめたが、それから懐かしげに彼女の手元を見た。

「昔は、山で暴れ回っては母親がこんな風に手当てしてくれていた。貧しかったが、不幸だとは思わなかった頃だな」

「……………」

「ある時、俺の住んでた村で次々と人が死んでいった。村長も、商店の女将も、隣の気の良い兄さんも、皆奇妙な発疹を腕に残して死んだ。それが流行り病だと分かるまでに、あまり時間は掛からなかったな。あつという間にそれは付近に知れ渡った」

「……………」

「国の軍が村へ向かっていると聞いた時、皆が喜んだ。国が助けに来てくれたのだ、きっと薬が見つかったのだろう、と。……でもそれは大きな間違いだった。国軍が到着してまずはじめに何をしたら分かるか？ 分からないだろうな。火を放ったんだよ。助けを請う人々を眼の前にして、国の犬たちは救える民すら皆殺しにした」

「そんな……………」

「俺は、俺だけは命からがら逃げ切った。でもまだ年端もいかない子供で、自分一人養っていくのすら難しい。手っ取り早く、俺は武器を手についた。路地裏で、それなりに自分のテリトリーをつくり

つつあった、そんな時だったよ」

そして彼は、苦しみとはまた違う意味で顔を歪め、そしてその漆黒の瞳を碧眼から逸らした。

それはまるで、自らの罪から逃れるように。

「今でも間違いないと断言できる。あれは俺の運命の出会いだった」

チェリアはいつになく饒舌なりベルエラを、ただ呆然と見ていた。

11 : 吐露

「若い、女だった」

王は息を吐いた。

その眼はどこか遠くを見つめているようだ、チエリアは思った。

「その日、俺はこの城下のマーケットを、当ても無くふらふらとしていた。何を買う訳でもない。何を見る訳でもない。ただ人混みに紛れて、自分という存在を覆い隠したかった」

右肩のみ、素肌を晒した黒衣は、彼を守るように陽の光を吸い尽くさんとする。

彼女の手によって巻かれた包帯はその黒を雪色に汚し、淡く輝いてはその存在を誇張させていた。

「初めから、自分を追ってくる影には気が付いていた。まあ、気付かない訳にはいかないほど分かりやすい尾行だったな。その尾行者から殺意は感じられなかったし、万が一斬りかかってこられてもかわせるだろうと思うくらい隙のある身のこなしだったかた放っておいたのだが」

それが、若い女だった。

リベルエラが言わずとも、彼女にはそれが察せられた。そして逸らすことの出来なくなつた視線に彼のものが絡んだ時、確かにそこにはチェリアの推測を肯定する色があつた。

けれど、同時に浮かんでいた懐古とも憐憫ともつかない何かは、その時を思い出した王が何を考えているのか、彼女に悟らせることはなかつた。

「誘い込むように俺が路地裏に入って足を止めると、女は頭を覆つていたフードをはずして言った。『お前、贅沢を知りたくはないか？』と」

彼が自嘲気味に吐き出した吐息が、彼女の銀糸を揺らす。

「その頃、俺は剣だけで身を立っていた。裏の世界で、誰もやりたがらない仕事を請け負つてはその中で評判と腕を上げた。それをどこからかそいつは仕入れたんだろう。……むしろ、その女の生きる世界の方が俺の噂は広まっていたのかもしいないが、

とにかく、俺はその女についていった。女が俺にもたらすものが、どれほどのものなのか知りたかつたんだよ」

そこで、久しく口を開いていなかったチェリアが言葉を発したことに、王は少なからず驚いたようだった。

「……………陛下は」

「なんだ？」

「陛下はその時、何を求めてらっしゃったのですか？」

すると王は、唇を歪め、皮肉げに笑んだ。

「……………力だ」

「力？」

「そう。すべてを壊す力だ。自分たちを見捨てた、すべてを叩き潰せるほどの力。そして女は俺の期待以上に、その力を俺にもたらし、ことの出来る人間だった」

そこで男はふと、その瞳に真剣な色を宿した。

「フィルザス、という国に聞き覚えは？」

「……………現在の、この国の基盤となっている国であるということだけは存じております」

「女は、フィルザスの第一王女だった。男児のいなかった当時、そ

の女がフィルザスの正式な後継者とされていた」

「フィルザスの、」

「そう、当時ランデル大陸南部で最も栄華を極めていた大国だ。

かつて俺の村を見放した王族が、あるうことか俺を拾い上げたんだ」

乾いた、笑い。

まるで彼が初めて会った時に見せたような、嘲笑い。

チエリアは彼に悟られぬよう、ひとつ身震いをした。

「女は奔放な性格をしていた。……まあ、それもそうだろうな。父親はランデルの南部分裂時代を生き抜いた男だが、娘は甘やかされて育ったただの御令嬢に過ぎない。

自分のやりたいことは何としてもする。自分の欲しいものは何としても手に入れる。我儘を絵に描いたようなお嬢様だ。次期フィルザス女王ともなれば臣下も民もそれに従うしかない。

だが、こんな奴に家族は、村の人間は殺されたのかと思いつながら、俺もその状況に甘んじるしかなかった。何故か分かるか？ 俺もまた、『贅沢』というものに囚われ始めていたんだよ」

チエリアは、唇を噛んだ。

男と自分とを隔てる白いシーツの小波に、無意識に爪を立てながら。

「昼間は護衛として、夜は女の欲を処理する道具として、その対価に身の丈に合わないほどのものを与えられているうちに、俺は尖った復讐心を飼い慣らしてしまっていた。こんなはずではないと心のどこかで考えながら、満たされない安寧を心地良いとさえ……」

男は、何かを振り切るように頭を振り。

そして次の瞬間には、眼に冷たい炎を宿していた。

「きっかけは、女の一言だった。ある夜、真っ赤に熟れた果実を齧りながら、女は誰にともなく囁いた。この世は自分のためにあるのだ、と。この国も、民も、すべて」

絶望が、溢れ出した。

「目が、覚めた気がしたさ。何のために自分は女に拾われたのか、ようやく思い出した。

それからの俺はひたすら、女に従順な素振りを見せながら同胞集めに走った。それまでの自分が偽物だったかのようにだったよ。驚くほど身体には力が漲った。

そして準備が万全に整った頃、かつて俺が一番に望んでいたことを実行した」

その日はひどく美しい満月が輝いていたのだと、王はまた遠い眼を
した。

12 : 告白

「銀月の夜だった」

さらりと寝台の上を吹き抜けた風が、チェリアの銀髪をしなやかに揺らした。

王はその輝きに一瞬囚われたかのように眼を眇め、彼女の髪に自らの指先を絡めた。

その眼に宿った光は、現ではなく過去の幻を映すような、どこかぼんやりとしたものだった。

「まずは女だ。ひどく簡単だった。……奴は、俺が完璧に欲に溺れた人間に成り下がったのだと信じ切っていた。信じ切っているそれを打ち崩すのは、蟻の群れを乱すことのように容易い」

彼の声はまるで、呻くよう。

「一突きだ。俺の剣は確実に、女の致死量の血を吸った」

そしてリベルエラは、寝台の脇にその意味を為さず転がっていた一筋の剣を、なんともいえぬ視線で撫ぜた。

「王の方は、なかなかてこずった。奴は娘を更にずる賢くしたタヌキだったからな。だが、どちらにしる多勢に無勢だという状況は変わらない。俺は自分の剣で、父親も葬った」

そして男は、侵略王になった。

「誰も俺の出自を知る者はいなかった。気付いた時にはもう俺は王城にいたから、どこかの貴族の令息だとも皆思っていただろう。姓名も地位も無い、いち農民の子供だったなどとは誰も思わない」

王は、語りきったその虚脱を吐き出すかのように、深い溜め息を吐いた。

チエリアは、さらりと傾いだ金糸に思わず手を伸ばし、そして肌を手を滑らせていた。

すると彼が、その感覚に気持ち良さそうに瞼を閉じ、唇だけを開いた。

「以来、王侯貴族は俺の嫌悪の対象になった。どうやっても高貴な血は、あの欲に塗れた父娘を思い出させる。実際、俺が今まで侵略してきた多くの国々の王族は、同じ匂いを醸していた」

そして男は眼を開き、チエリアを真っ直ぐに見詰め、「いや、違うな」と呟いた。

その指に絡んだ銀糸が、ぐっと引つ張られるのに、彼女は抵抗しなかった。

「俺は、怖かったんだ。見破られるのではないかと。決して清いとは言えないこの血を、あの女にされたように否定されるのが許せなかった。所詮成り上がりの、欲に塗れた下賤の者ではないかと。だから、今までこのブラッディ・インナーに捕えた女達には必ず訊ねた。『お前は、俺が怖いか』と」

互いの視線が、絡む。

「その言葉に対して、返答をしたのはお前だけだ。ある者は憐れむように嗤い、ある者は蔑むように睨み、ある者は怯えたように泣いたが、誰一人として言葉を発する者はいなかった。

新鮮だったよ。お前の答えは、俺が今まで施政者に求めたもの全てだった。こうであれと、俺がそう思って民に実行してきたことを、認められた気がした」

そして王は、薄く微笑んだ。

その微笑みには、今度はどんな皮肉も嘲りも無く、ただ純粋な喜びばかりが浮かんでいるようだった。

初めて見せた、笑み。

それは少なからず、チェリアの心の深くを刺激した。

「お前を抱き続けたのは、少しでも思いが重なればいいと、交われ
ばいいと思ったからだ。侵略王と呼ばれるほどのことを繰り返して
きたその贖罪を、お前にも背負わせようとした」

「……………」

「同じ理想を持つ者ならば肯定してくれるのではないかと、共に背
負ってくれるのではないかと期待した。初めて自分が孤独だったの
だと思い知ったよ」

「……………」

「だから、初めて後宮で女を抱いた」

そこで、また今まで黙り込んでいたチエリアは、思わず問い掛けた。

「どういうことですか？」

王は、そんな彼女にまた笑みを深くする。

「そのままだ。この後宮で抱いた女は、お前以外にいない」

「ですが、侍女たちは皆、陛下が訪れるたびに悲鳴が響き続けてい
たと……………」

「最初にぬるい抱き方をしていないからだ。皆が俺を見るたびに悲鳴を上げるほど」

「でも……」

「お前には相当な手加減をした。あの女に重ね合わせて憎むことは無かったからな」

それだけ言うと彼は、唇を弓形にしならせたまま彼女の銀糸を更に引き寄せ、何の前触れも無く彼女の唇に自分のそれを重ねた。

初めての感覚に、チエリアはただ、呆然とした。

「甘いな」

それはまるで、熟れた果実を味わったかのような甘美な響き。

チエリアは顔を途端に真っ赤に染め、その様子を見た王は、驚くべきことに声を上げて笑った。

「正妃を娶ろうと思うんだが、どう思う？」

そして唐突な、問い掛け。

チエリアは反射的に、「どちらの御令嬢をですか」と聞き返してい

た。

それを聞いたリベルエラは目を丸くして、更に苦しそうに笑った。

「言い方を変えよう、チェリア・ヴェラノス」

「はい」

「皇妃となり、共に国を治めないか？」

リベルエラの言葉に、呆然となってしまったチェリアを、彼は更に愉快そうに笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6594v/>

侵略王

2011年10月6日12時39分発行